



油井根元記

合巻全

リ 5
3623



3633
5

水

神皇正統記序

皇天降命於高天原
神代卷
天照大神
天孫降臨
神武天皇
神代卷
天照大神
天孫降臨
神武天皇

沖井根元記序



東成とむ虫、亦より生じて終と亦と換う
氣のぶらふまそ、まをそんくはまよま
いさふぬく作を中世のうまう後府におわそ
健井正吉もまをそ丸橋お孫のく送を
相りよりして、まをそらと、うま川はけし人にれ
風まらしくなり、まよ林田お房も後内山下
洋島も中世の者、つよよ、西役と拾ひ
二つよ、よ乃、伊保後、本後府、本城の内、或ら

見おふしむく事終るく徳意の法法とくあは
まふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは

はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは
はらふしむく事終るく徳意の法法とくあは

沖井根元記一目錄

一 沖井西宮あきる事

附 勿雅發のれり

一 沖井西宮九橋左孫。初め封包の事

一 西宮と左孫揚こころる事

一 合井まきまるとま案人まきこころる事

一 西宮と左孫法玉の案人誘引の事

附 後除るま案一乃あきる事

一 左孫母いまんとあきる事

一 西宮平家物語の件と書る

附二物や又助事

一 丸く書に物ころれ事

Handwritten bleed-through text from the reverse side, including the character '一'.

Handwritten bleed-through text from the reverse side.

Handwritten bleed-through text from the reverse side.

Handwritten bleed-through text from the reverse side.

Handwritten bleed-through text from the reverse side.

油井の書あま事

附初雅交ぬの事



又油井の書生と後府油井の紐屋ろり事

これより油井といこよよびなうせけら

初雅より家業とこころそ武藏の法事ととら

なと根こしとたわわらふとまきあよひ事乃所

高松事年といふらう人あたよ軍を成用とて

ふら事那のきらよりとらあ大坂の坊とて初て酒

讀きつら書に初少よりいこころき者とて隙の

多るのいひ言ふ或はよもそそき天谷元旗も入
かには普法の師にあふれたるふあつてこそよしと
あひまらるやむつ事とあつめ爰物候しきるら
さる木桶に成と爰中の封包しひのこく梅よ
ましく成中しこれらにひきかきししく我は筆を
そりきひきりしあつめあつめしきりし後府候方の
松が福よこそるまらまらこふこ急とすここと
漬て爰にふあしつらとこつらとては唐のたはせ
口の中を登入よ爰をこつらとこつらと

美爰のきりしはしりしはてはる人びりて
いひやこつらしこつらのきりしつらとては唐のたはせ
まこし志よそはきりしは位用志とこつらと
あけぬ神くきりしつらとては唐のたはせ
ひしきりしつらとては唐のたはせ
福こらよ人数とけりしつらとては唐のたはせ
爰とのかこらよ人数とけりしつらとては唐のたはせ
堀あしつらとては唐のたはせ
乞とけりしつらとては唐のたはせ

相款の爲ふはちりひやきし

津井に在る丸橋おゆよゆら射向る事

爰に東武ら町の邊より丸橋おゆよゆら射向る事
あゝ人をはきつり身数あありて、その事さし
世のはりひらひらする男あささひ、射向る事
そあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ら解る事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゆよとちぢよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆ
ゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆ
軍人よ奥村よちぢよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよ
お合知人よあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
るやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
彼中へよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
果しては、ちぢよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよゆよ

祓文と云ふ事しきり神の祓札と清くぬらす
所と申すまれして大塚の武の元を遠
沖井の藩府にたすしと云ふ誠の事なり
しるしをいひつゝ讀むるに是はた
しるしをいひつゝ讀むるに是はた
しるしをいひつゝ讀むるに是はた

あつ目には大塚の方へ行て一日酒宴の席
ありて酒をぬしつゝ酒をぬすむ
ありしたと云ふ事なり昔の事なり

大塚の事しきり神の祓札と清くぬらす
すてゝあつ目には大塚の方へ行て一日酒宴の席
ありて酒をぬしつゝ酒をぬすむ
ありしたと云ふ事なり昔の事なり
しるしをいひつゝ讀むるに是はた
しるしをいひつゝ讀むるに是はた
しるしをいひつゝ讀むるに是はた

此と如きものありしむるは後方のゆめく
とあるしやまゝいふにまじりたるもの
ありの者ありしむるは後方のゆめく
りりたるは後方のゆめくありておぼ
かふいふにまじりたるは後方のゆめく
高野経師長考といふ者の語あり火あり
おぼふからしむるは後方のゆめく
ふいふにまじりたるは後方のゆめく
つとむるは後方のゆめくありておぼ

た火ありしむるは後方のゆめく
二十しむるは後方のゆめくありておぼ
れしむるは後方のゆめくありておぼ
楠うねふとんありしむるは後方のゆめく
の邊ありしむるは後方のゆめくありておぼ
まゝの語ありしむるは後方のゆめくありておぼ
しむるは後方のゆめくありておぼ
はしむるは後方のゆめくありておぼ
二方日となくしむるは後方のゆめくありておぼ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

津井根元記二目錄

- 一 播磨守元記作名を問初なる事
- 一 後府且洗村を全うと云百姓の事
- 一 丸橋右近真村八百たうは福は事
- 一 西宮右近よ右例と云く夫人の事
- 一 四月廿六日の夜殊後の事
- 一 今井もまを東を問初たう大坂の事
- 一 かねてたう然るをまを東遊真らう
- 一 附然るをまを東遊電の事

一 正當格をたてし、後悔お波の事

一 附者空印大塚の合力の事

一 津井と方書物と伝うたりの

一 附者空印大塚の事

一 附者空印大塚の事

一 附者空印大塚の事

一 附者空印大塚の事

一 附者空印大塚の事

一 附者空印大塚の事

増上寺北條信長古圖初巻の事

其の古圖初巻の事、南無阿彌陀佛のひおたかり

元、増上寺の北條の事、元祖の御心と今心

増上寺の文より、浄土の事、増上寺の事

増上寺の事、増上寺の事、増上寺の事

増上寺の事、増上寺の事、増上寺の事

増上寺の事、増上寺の事、増上寺の事

増上寺の事、増上寺の事、増上寺の事

増上寺の事、増上寺の事、増上寺の事

増上寺の事、増上寺の事、増上寺の事

てけいこの約束として始終をこころで隠し居てあり
ていといひまるところ

後府足洗村は尾上と百姓の事
大福よむるひそふ後府(おむいさで我死す
あり城郭なれは後府ののりとして東西乃
ち龍田ふれは尾上とていふまゝしてはこゝに
たふの町中よ火とけ加番元徳大寺お諸君
の後者よ指よ多し後府おおむる町に入信
たふとていひ九世よは徳(宗入)とていふ

たふとていふの町を軍陣の當りなれ
ていふ(おむいさで)は尾上とていひあつた多
城下足洗村は尾上と百姓とていふ大福と
なれ(おむいさで)とていふとある人多し
あるとせむるは尾上とていふは尾上の運指といふ
程におむいさで(中)おむいさで(おむいさで)といふは
ていふことあるは尾上とていふ(おむいさで)といふは
尾上とていふは尾上の事といふ(おむいさで)といふは
尾上とていふは尾上の事といふ(おむいさで)といふは
尾上とていふは尾上の事といふ(おむいさで)といふは

書からわきまをいひしるはと海にたつたをせむるを
しつ支那と始と佛社のやうにたるといふ
るにいふはとあるはしつとたのめかしと
うめはしつと判よとけつはしつと働え
えらしつとわしつと名を換けたと
はしつと

丸橋から奥村へ来た日は福地

夜のぬためしつと昔のたつたのつと
はしつと

はしつと丸橋のつと常と拂ひ奥村へたつた
西のつと合しつとつとつとつとつと
はしつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
丸橋つとつとつとつとつとつとつと
錦中やたつたつとつとつとつとつと
はしつと丸橋つとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと

四月廿七日東洋後のみ

嵐社ふるくきりう抗虎のいんおん
る西智紀伊大細之孫のいんおん
若て改小流堂武千余人とそ中より多謝
思し時おんぬさういんおんいんおん
とくつと園く立城下く志のそし時おん
さういんおんいんおん文社とそいんおん何
四月廿七日の夜中いんおんいんおんいんおん
流あといんおんいんおんいんおんいんおん

方た又どういんおんの色た中いんおんいんおん
いんおんいんおんいんおんいんおんいんおん
依京十兼長山雲いんおんいんおんいんおん
兼長山いんおんいんおんいんおんいんおん
九右衛門いんおんいんおんいんおんいんおん
いんおんいんおんいんおんいんおんいんおん
いんおんいんおんいんおんいんおんいんおん
いんおんいんおんいんおんいんおんいんおん
いんおんいんおんいんおんいんおんいんおん
いんおんいんおんいんおんいんおんいんおん

後脚を兼てその宿舎人としてまのつらさから
と取く評定しきつは詔よん程に成はる武勇也
らふ希代未だの言もあつりしは海舟のあつり
運のはるる今津川も流まつりかづの程も
流は流りてもあつりしつりしつりしつりし
今もの色もあつりしつりしつりしつりし
せしつりす放つ時つりしつりしつりしつりし
にわつりしつりしつりしつりしつりしつりし
子孫もつりしつりしつりしつりしつりしつりし

おちしつりしつりしつりしつりしつりしつりし
評定も此の九折も大坂の吉田也今も評定
るがにおちしつりしつりしつりしつりしつりし
ていもあつりしつりしつりしつりしつりしつりし
たつりしつりしつりしつりしつりしつりしつりし
二九もあつりしつりしつりしつりしつりしつりし
夢のつりしつりしつりしつりしつりしつりしつりし
今つりしつりしつりしつりしつりしつりしつりし
のつりしつりしつりしつりしつりしつりしつりし

白虎に抜のくわいせいのまはしるゝいんまが申命をよむに
或は城の毒を流し一ち下もらひ生死の境を極は
極うるやうふか者のの中一毎うつゝ取交はるるを
はことぬせすといへりるを極はしゝ心者の心は
はやうといふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
とくまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
おきとるぬれまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
かたかといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
らうといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに

おきとるぬれまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
かたかといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
らうといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
とくまゝいふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
おきとるぬれまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
かたかといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
らうといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
とくまゝいふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
おきとるぬれまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
かたかといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
らうといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
とくまゝいふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
おきとるぬれまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
かたかといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
らうといふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに
とくまゝいふまゝいふまゝいふことなれは来は後府を申ふに

因よりくしとけいひさしく若退がしきり成りて人
 一麻う苔の舎合籠子の首をかくてを表とす
 たりとやそれの傍にたての心をもたれがうとよむに
 丸指まの鬼界の清きい途をきく米の足代とそ
 といふうけ面といひぬを表とするまの合をた
 乞禱のつ舌の足軒の口口とらしてよくくち成
 ち減せし方とあじりのいへは富平一とくも
 為の毛もして是もかむかしくいれ

合井中兼右田物志大坂の白馬の

右田初たら合井中兼正富のわねは度しして
 意馬は轡とり人旗よも徳もそそをて改め難成
 けの無愛たそを越る目とるて指針よまそ兼
 へ後右の意よとらぬ新想をもた初たらい馬よ
 高きりるを種おぬ人奇の似く城の内無徳と
 けいりとも注の石とかくく深き園とをるるに
 じりくを目敷とさうくうくしておの流堂のえ
 びととおしこい湯浴をゆつしておの流堂の海
 初たらいしはあまのうらみとくわいりいんいん

このころから捨替をなす然るに其の一日の
の回数と毎て京と一井戸の間に海とありし
とあるは此の程いふことぬれぬ程よく
申す様の日とのとて角の程よくいふ
このころは遊びく其のいと存し
あつぬ者ともいふことだふおつぬ者とも
程後らぬ程とありしに際の際の程よく
このころは遊びく其のいと存し

あつぬ者ともいふことだふおつぬ者とも
捨しぬることも係りしと係りぬれぬ
用事とある或る料は是れおふ換矢せり元
月又ふりておつぬ程の中へ
為欲顔のぬれぬことあるは是れおつぬ程
申す様の日とのとて角の程よくいふ
申す様の日とのとて角の程よくいふ
申す様の日とのとて角の程よくいふ
申す様の日とのとて角の程よくいふ

心と縁よき事より成就の勝縁成を
あけて業縁のこす事とんものもたそと
言われ徳名の中よこひる公壯子の多勇士則
多懼富則多事壽則多辱是三者非所
以養徳也こや誠富家と凡の前より
火こそさひ遊して怒ると園東の事いんえさ
つまり実事よあひむい事のものこもこもいんえさ
こととして約束とたれせそあひる後よ自
の者よそ出ぬとこれ例も入る事いんえさ

わろいこといけのあひるいんえさ
般般の合言こも事とやぶ傍の事いんえさ
抑汝に成者と先佛之化と解ここもそいぬ
成よ徳名もけ時やわどけぬん け後時あは
のりあれもえけぬ後時府とけなはたぬ
あきぬと合せたるものゆたのたぬ
こも物持たたよ後悔お後のみ
附者いんえさ合カれぬ
百貴法教のこもいんえさこれいんえさ

言野小入と云々と女並し傳教は教ふいふれ
も飛とつや正音と云々と立て合はるるふと
その物もたたらこし者にもまの園東よりの
お掛がうあられお返と討てあつてもいひれ
さもおとゆずのちこいれ文歌の者そは智
識し者より紋賣ひ方のとこいひ金く金銀
のふは換とてい九格ゆといひまるともれ
しそ富貴と智志のなる貧と隆と歌のう
すことゆとるものなるにら師後部部ハ

九格の年月ふ力を添て塩場の新とこいひ
只理もれは候まきとゆとびたりお返とも
れおらうといふ及つひ百夜とつとゆと
とれといふおらうのゆとといふ年の
ゆといふれ兵お返といふ事とつと
百との通級とあといふとつとれ
といふとつとれといふといふといふ
といふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふ

るわんわんし、有る事、あつた、うん、うん、うん、うん、うん、
 じつ、く、七月、この物、く、今、今と、被、被、被、被、被、
 る、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、
 と、の、し、く、も、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 海、り、と、今、今、今、今、今、今、今、今、今、今、今、
 も、れ、也、伯、夷、叔、齊、顔、淵、閔、子、騫、原、憲、子、夏、南、
 華、老、人、五、柳、先、生、浣、花、公、羽、陳、伍、山、是、等、ハ、ミ、子、
 ま、ら、い、こ、と、楽、し、め、ら、う、もの、孟子、富、不、仁、為、仁、不、富、
 矣、こ、ら、り、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 さい、の、れ、い、ら、と、い、ま、り、う、り、う、り、

西、宮、上、方、へ、去、籍、を、行、く、事、
 附、下、へ、八、巻、く、の、事、
 去、り、た、お、お、の、後、の、教、を、う、て、こ、も、別、を、こ、た、お、に
 び、ま、れ、とも、日、中、一、の、事、事、ま、れ、お、ら、う、後、満、ハ
 十、二、こ、ら、り、油、井、と、丸、橋、と、並、於、大、坂、の、事、
 へ、く、飛、脚、と、い、う、事、の、や、う、と、い、う、か、ら、い、と、
 得、定、し、ら、り、な、る、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 匹、更、も、あ、ら、う、に、元、身、流、堂、の、ま、今、の、事、
 匹、更、も、あ、ら、う、に、元、身、流、堂、の、ま、今、の、事、

三つのお後よもあらはけりて一人にト人の指より
らへはちあはれふりていふにいふにいふにけり
今度の大切の使われへはたすて来たの者され
そこの言を籠とまゝにいふにいふにいふに
射しけりていふにあらはれぬてはたすて
を御せりていふにあらはれぬてはたすて
なまに焼失せしお念ひの人のいふに
一人の女をまゝにいふにあらはれぬてはたすて
また他にいふにあらはれぬてはたすて

いふにあらはれぬてはたすて
いふにあらはれぬてはたすて
及にいふにあらはれぬてはたすて
控授てその指よりあらはれぬてはたすて
中とまゝにいふにあらはれぬてはたすて
いふにあらはれぬてはたすて
いふにあらはれぬてはたすて
いふにあらはれぬてはたすて
いふにあらはれぬてはたすて
仁義誠場よは生死の二字とてを水に合はせぬ

只徳母の二子と云ふは、
けぬ徳とは、
とふ極て、
系、
う、
版

沖井根元記卷之二終

沖井根元記三目錄

- 一 飛膝拾列ふ方集る事
- 一 合井吉田返状の事
- 一 伏見舟揚ころり事
- 一 八尾天竺の渡り事
- 一 廓院ことお家の事
- 一 西宮後府おのびく事
- 一 古跡田代又倉つゝ合と借り事

附ら所後三節傳傳の事

1. 1870年...
 1. 1871年...
 1. 1872年...
 1. 1873年...
 1. 1874年...
 1. 1875年...
 1. 1876年...
 1. 1877年...
 1. 1878年...
 1. 1879年...
 1. 1880年...

飛脚指列しおきた事

版心は花の夜を日と梅は先有らふけのちりて
 初巻は對面し書方右田の半生おふさうせぬ男
 して園東の事いふたさうは終り合井(若さうはれ
 合井大さうしうとていふ事の家おれしけり
 おお初巻のうらむ月を園のちまよこ作とらん
 うらむとあつとてあつたまよこ右田友さうしう
 ちかむにそあれたのそまうしうとあつた
 うらむ初巻のおきて何とあつたそまよこ

よりいふ所の書物を見しところをいふ所は
うけとていふ所をいふ所は復たいふ所の
用とていふ所をいふ所は合井とていふ所は
すゑとていふ所をいふ所は合井とていふ所の
書物とていふ所をいふ所は合井とていふ所の
しつとていふ所をいふ所は合井とていふ所の
おととていふ所をいふ所は合井とていふ所の
別とていふ所をいふ所は合井とていふ所の
以書物とていふ所をいふ所は合井とていふ所の

通していふ所の書物を見しところをいふ所は
近頃の及ぶ書物とていふ所は合井とていふ所の
秋の及ぶ書物とていふ所は合井とていふ所の
拾列の及ぶ書物とていふ所は合井とていふ所の
映るくいふ所をいふ所は合井とていふ所の
おととていふ所をいふ所は合井とていふ所の
居ていふ所の書物とていふ所は合井とていふ所の
おととていふ所をいふ所は合井とていふ所の
おととていふ所をいふ所は合井とていふ所の
おととていふ所をいふ所は合井とていふ所の

水用にあつたに違ふた道付て一連綴
か去綴に成不付綴て乃火申以次と

寛文四年卯月日 油井西書

九指太紙

合井も兼友

吉田初之友

初巻二と巻三の巻一と巻二を合して成り
別巻の文或友との違者ゆくと云ふは

合井吉田の通抄の事

然るに友人の記に合ひてと云ふは
巻一と巻二の巻一と巻二を合して成り
有るに同くこれと云ふは
二人の撰まけりやと云ふは
りとも一巻を月小巻としひこれ
よその者より取附めたりと云ふは
是も取附めたりと云ふは
巻一の巻一と巻二の巻一と
二人の撰まけりやと云ふは

信よ返書こそむよふとて初書居て是書居る
毫もつたつたつて意のこころこころとていふ
いふ書居る趣なる所随ふとて言ふと合ふ書居
こころはた不か書居る言ふと書居る
千度百度討らとて探好の中へ書居る
言ふと書居る言ふと書居る言ふと書居る
能りいふと書居る言ふと書居る言ふと書居る
つて大事なることとて言ふと書居る言ふと書居る
言ふと書居る言ふと書居る言ふと書居る
言ふと書居る言ふと書居る言ふと書居る
言ふと書居る言ふと書居る言ふと書居る

九橋おのり
御井の書居

柞世初より元身坊のころのミナトを著した意と
おのれは小学のひまを編むに裁のこめ上
京よりこよよといふおのれもやふ川は金とて海
路は遠信の者と成るより元右孫次郎の志ん
れり金銀は富をばはくして押取せよといふ
ものありといふころの事を信のつこいおのれも
はらけし海ものひらりころりききすむら者ハ又
はらけしこれこそ文をばはくして金銀をばはく
伏見おのれとての事

公義のひらりころりて信は教の信のひらりころり
ころりころりころりころりころりころりころり
吉田とておのれとてこれとて厚くかして之別ま
ころりころりころりころりころりころりころり
信ひらり信ひらりころりころりころりころり
とてころりころりころりころりころりころり
信家の信家とておのれとて信は信とて信は信
と信は信とて信は信とて信は信とて信は信
天の信は信の信とて信は信とて信は信とて信は信

そ根よりのもゝとてはてはらうらうらとて年
家の福と六代とてくはれぬひとてうらうらとて
丁を忠今とてふあつとてのらね文字ふとて芬
まゝとて報難の程にあつとてうらうらとて忠義
丁を忠今とてはれぬとてはた(別ま)うらうらとて
体へ便私と求め心の物とてあつとてえより
棹とて舟の癪とれ先の指のをく体へ
とてあつとて似すえ(うら)とて命の志とてうら
小評とてあつとてうらうらとて八幡山社関白

秀吉公の四徳無窮とてはれぬの如月の難敵
まゝとてあつとてうらうらとて母捨財とて子捨
る(中)文とあつとて後世の物とてはれぬ
色郭公の言のうらうらとてあつとてはれぬ
四徳世とてはれぬ

病とてあつとてはれぬ我男とて報難のうらうらとて
誠とて盛者必衰とてあつとてうらうらとて一
乃とてあつとて年の栄花とてあつとてはれぬ
我男とてあつとてはれぬ

下らうの申人の仕合こそんうれね申すも
いふは仕合人こそんうれ身たのありは
ひさこをこらわれしこそんうれ
こは病く我は人名のそんうれ
多きやこそんうれあはる者あはるは
あはるこそんうれあはるこそんうれ
水は舟のそんうれあはるこそんうれ
道は舟のそんうれあはるこそんうれ
あはるこそんうれあはるこそんうれ

八義天竺れねあはるこそんうれ
去程のそんうれあはるこそんうれ
しとれ切つる然るこそんうれあはるこそんうれ
未束のそんうれあはるこそんうれ
よりのそんうれあはるこそんうれ
海は舟のそんうれあはるこそんうれ
あはるこそんうれあはるこそんうれ
えんれあはるこそんうれあはるこそんうれ
申すこそんうれあはるこそんうれ

こまにぬゆしこのづらきり柳け廊縁と申
法師自蓮と人の遠戒と清言後ふく妙法
のあまるとあつしめ文句あつくはば申の言は海
自力の一念三千すまじ統くこのぶ山の法打
としかけらるるに方のかる流堂とを前代集家
たあまるとあつしめ文句あつくはば申の言は海
謂力人果及つてんぬと武と世に身はと
色とあつるをあつる百矢の徳のさるる也
兼おつるにこの法は徳あつるまらふる事也

正智後府のあつる

事あつるけ流堂の流案のあつる
とつる立て家代雑具と代ははしとつる
久流よりつるのあつる市人のつる正智の
七月たつるのあつるのあつる一人あつる
一人のあつるを武のとあつるふ川海と天と
ひつる志のあつるを徳のあつるはつる
あつるとあつるのあつるのあつる眼代
拂つるつるのあつるのあつるのあつる

并々をより有徳念よのりせらるるといふ事よ
而の者とも縁念（所）祚よといひ今白旗の船と
中義経舟をより有徳念よのりせらるるといふ事よ
と流るるれは然るをいふるるるるるるるるるるる
いつひいつひといふるるるるるるるるるるるるるる
よといひいつひといふるるるるるるるるるるるるる
小田原は旅着して故郷の浪の音よ年と流るる
後白門の法皇の御衣六の塞が後川の木の法皇
そいふといふるるるるるるるるるるるるるるるるる

りまげらやんといふはいつひといひいつひの
春はいつひといふるるるるるるるるるるるるる
流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
急るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
よといひいつひといふるるるるるるるるるるるる
まうそれより國家よあつたけれはいつひといひ
方よせらるるるるるるるるるるるるるるるるる
健井西宮とて者よいつひといひいつひといひ
純列といふるるるるるるるるるるるるるるるるる

波のしひかれ 関守一之の流後よとむる人
こそ昔よりかへりけれ 之流の神よとて拜せ
たし 緑波より捨てし中乃松原六代出前の
奮り成石指いしそより 流して夜とさあふ葉の
情文字の働新とさひかれ 流るるそと流るる系
足拓の富士のよそその小狩の色をぬましと
流よあつとを京の宿より 西宮廓終よ西
海澗 繞漫 半邊影とひけれ 廓終多支
漁舟戴雲行と乾峯詩と水のわらうと

あつとてをぬましとをぬましとをぬましと
せんころあふ今やあふいと 自後所へせつと
はあつとんの田のうらを かつとあつとあつと
ついでいしとあつとあつとあつとあつとあつと
たつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
流る流るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるの町人梅屋と中者の方ふとあつと
こそ旅人あつとあつとあつとあつとあつとあつと
まや大角い元の流よ 骸とせとく 漢文のあつと

これに當りては古に傳へて來りては
りては人にも傳へては

右孫田代文太郎の命を傳ふ事。

附ら師教の師傳傳の事。

東武より右孫田代文太郎の命を傳へては
月より傳へてはをわれ大方は首尾十と九の事
たりたり右孫田代文太郎の命を傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては

けりては右孫田代文太郎の命を傳へては
張るるに傳へてはの命を傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては
りては右孫田代文太郎の命を傳へては
又ならる事にも傳へてはの命を傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては
るく傳へてはに人傳へては何れも傳へては

知人より一書く曰代々傳へる書付申を抄集
しりしはたしむる判の文出らばいれまらぬ
よらばしるすの原故かしてはしるす
そとよらばしるすかしてしるすは書
の文とたよらばしるすかしてはしるす
うらばしるすかしてしるすは書
ら原故の原故の文とたよらばしるす
りく(はしるす)はしるすの文とたよらばしるす
すらばしるすかしてしるすは書

中あり今中書付申を抄集しりしはたしむる判の文出らばいれまらぬ
よらばしるすの原故かしてはしるす
そとよらばしるすかしてしるすは書
の文とたよらばしるすかしてはしるす
うらばしるすかしてしるすは書
ら原故の原故の文とたよらばしるす
りく(はしるす)はしるすの文とたよらばしるす
すらばしるすかしてしるすは書

とてあつてはちしりしりいふのちのち
はあつてはちしりしりいふのちのち
甲はあつてはちしりしりいふのちのち
もとてあつてはちしりしりいふのちのち
あつてはちしりしりいふのちのち
あつてはちしりしりいふのちのち
あつてはちしりしりいふのちのち

他井根元記巻之三終

他井根元記の目録

一 田代又なるとせん事

附松平信昌と奥村許人の事

一 丸橋右近めしりし事

附中屋房主判状と焼る事

一 業田之と米運電る事

一 正吉軍城と考て用と事

附物升大系と及後府小恙事

并後府とと事

一 大久保玄蕃後正室小對面此事

一 正室自言此事

一 附廓院の志やくのり

一 正室の書捨んら此事

附足洗村まはるに捕らるる

一 高初志の有馬よそに捕らるる

附金井まはる天皇寺にて自言此事

一 般若をたのむ事

附金井の首園東にわらわること

一 加藤方たる内世辨栲問の事

附柳京越中やな久能(菟)らるる事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

田代又たなごめん乃事

附松平任其者(真村)新入たり

かして田代又たなごめんとは道は海と茶室中(をり)九橋(身)雑談の趣(て)は進(一)きれ(は)若(鞍)之(至)合(各)の(も)せ(馬)よ(お)ま(く)上(向)よ(達)一(所)運(は)種(と)ん(り)る(な)に(は)所(名)に(ら)る(は)石(衣)の(所)有(る)新(入)の(も)く(り)れ(は)新(入)田(代)向(ら)て(先)進(言)は(進)れ(る)こ(り)も(ら)初(め)は(く)社(由)成(所)人(定)ら(と)ふ(と)た(ま)よ(ら)る(る)の(所)別

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 田代, 松平, and 真村.

浪子ら師友を以て爲りたり又いふ所ありこれ
おけんは後林埋たるも亦も許人数を以て
これ松平信直を後にも同許人ありて強執るる
者元來奥村の志は亦も奥村信直同名
異なりてそのまゝなりければ信直を後にもその
者も亦もい縁は信ては是松平早變を後にも
八重を事と石段の事ありて言ひたりては
信とよらうといふ事ありては奥村信直同
異なりて松平の威より信直を後にも松平
のいむ志の事三作世を信直を後にもおけん
といひては万端の事ありてはよらうといふ
事いひては地縛田は松平もは松平信直を後にも
ゆきりたりとたはけは後ぬものもかきり
とていけん

九指太孫巨捕り事

附廿五房も利性と居くり
既よ西宮の渡府より中許人の趣に似て御井
志事と居付りては信直の殿中より事

とてあはれふらむい家申に遊むの月三つあてし各
はとそあつらりね又九徳うまひも夜を言はば
と大切の因人あふしと申(お交てそ意れきり
いそふ合備屋の者と語り悲ひくよふもあはれ
大まといふこととおまよ踏入念いせふこと
おまよ九徳の系種とてい御也と笑くあて
あはれ九徳の家よをねらわれすい謝らんと
よふれと合備屋は強動いせ大まよあよこのま
いことせらむとあはれ九徳あふく女房あはれし

ひと人帯と志あかきもらあ(い)まはる是とあはれ
運の初め次よ寝ころりろ八徳とあはれあはれ
ふれて飛ておこいせとていあはれこころ
一書よる遊海屋よあはれむすことしたはれらり
あひあつら九徳よあはれあはれいげあを者と御也
どういふことこころなげあはれ海と二あつらあ
あ今く寝ふ縄目のころりよあはれあはれあ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あつて判状と方角一物より紙の中は色と
しつぱりのあつて一とあるは海軍のしつぱり
奥のふしとあるはしつぱり女房のふしとあるは
のりともういふ若さる母と女と女と女と
は入つて一とあるのあつても拂ひ指極とあ
つてはとあるは一とあるをほつて一とあるは
つとあるは白のあつては神の身はあつて一とあるは
とあるはあつては女のあつては一とあるはあつて
こととあるのあつてはあつては揚中つとあるは

虎の尻とあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつては
同母女房と人の子とあつてはあつてはあつては
とあるはあつてはあつてはあつてはあつては
とあるはあつてはあつてはあつてはあつては

果てに果てに果てに果てに果てに果てに果てに

なるは果てに果てに果てに果てに果てに果てに
たつてはあつてはあつてはあつてはあつては
業とあるはあつてはあつてはあつてはあつては

人の心とていふ事多し人数とあていめてこそあり
りの藩府の町中、大番及早番の折立とあり
目録のいびり、おのむきつあつたふりてきり風等
志らく、切支丹定りの者は、おのむきつはし折人
あて、おのむきつ味あつた、おのむきつ二人、おのむきつ
能く、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
若男女、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
小多、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ

梅屋、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
よ下、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
て、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
よ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
後、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ
おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ、おのむきつ

けと六紙の歴史をいひたりたるはまゝ向ふへし紙ありの

大久保と青原沖井と書ふ封包の事

わけて大系を後使をいふ梅屋の在處(云々)入れ
たりといふ及國もあつり人と改く立返り者けりあ
落多しし指し系使して治民とさけりその
従ふくも疾を著し出たりあはれ出(云々)は
出たりやいふ事及り及とさやしんくは若きと
ひて使たりと使してらんかるもいひけりよ
あつくりは紙に改められたる某紙の紙行

大綱を抄めんとし出たり紀行(目録)をいふ
子紙の紙を改めたりいふくおはれ紙を使ひて
而れの御よていふも改め封包とさげせし
うらんよと改めたりいふ人(在處)人と出たり病御の
義田の在處たりと改めたりいふまじりたる大系者州誌し
紙を改めたりいふ病御の改めたりいふ在處者
或書と改めたりいふ改めたりいふ封包と改めたり
いふくは天下の改めたりいふ改めたりいふ
いふくは改めたりいふ改めたりいふ改めたり

町並の蔭合は美談なりと申かてたし趣はたゞ
けふは毎日の若国にこれいかにいかにか
仕合の力を頼む方とすけり水もたゞ大海と
川流のとも中なるものなむいかにいかに
よしてことごとくあつて申されし言おれ
て押付て来し言物の毎らんかていと用を
以てしことい捨てていふらるるいぬり
威もそ人ふしたるいふらるるいぬり
一人様いひていふらるるいぬり

一如とん換したるいぬり

心若自言なり

附廓然といふ

音もよこし言をいぬり
輪れたをたゞ古来は東傳た廓然をいぬり
漢のころといふいぬり
今の言をいぬり
心若の言をいぬり
いぬり

鉄の板成の造作一つまゝも終よてぬ是古例
のまゝいかにあつていかに中絶とてうらみ
東照文の教度の教言をのれくおまへを
そと路を各々傳へて訓法するは是ひ
武運の難あらそ私をくもく丸指た
かこくの中しつは梅とさるや加ふ十歳
もあつてはあ天人とあ表の目ふあつた
たてく海とりの行ふに海の手拾と徳あ
是と伝のうらふをなぬ麻織の白ひ中集
くまやうひくふを後と教へて度と衣判髪
の田あつたはと其くくしたるひん
己んさのいんもむく成佛のあんとあ
くれはさくちあさふふらあさあ
ふ者路よりあけはあを能とのとんた
るむわさくはとひぬあくひん
とたの服よあまゝいとあくく
ととすうし路よあ海とれ首あ
ととすうし路よあ海とれ首あ

らかかきまれの老はりのいよふいよふいよふ
きまうとまうたふくと浦とてし母のあま
あふらう大久保言まあな物かた系をなま
つすす自言こまもつふいふいふ捕りまのり
まふれたまふくふい保身保身おれまの
おれつこまらりいよふまの縄とらりまは
る力及す口とらりい切拂く礼をらりまは
廓然とまやふいけまを物かた又におられ
まらうんて礼入のむい言まはままわい

らかかきまれの老はりのいよふいよふいよふ
きまうとまうたふくと浦とてし母のあま
あふらう大久保言まあな物かた系をなま
つすす自言こまもつふいふいふ捕りまのり
まふれたまふくふい保身保身おれまの
おれつこまらりいよふまの縄とらりまは
る力及す口とらりい切拂く礼をらりまは
廓然とまやふいけまを物かた又におられ
まらうんて礼入のむい言まはままわい

附足洗村まなすり捕りまの

礼の後天井とららあまあはてしこま
しとまこれこ元身まらうまへこ徳のおとま
と焼失のまま合おふい麻の菓糖の園のま
あらうる相た系をなま言まあな物かた系をなま
ま此のまらふま捨いりし毎とらりいよふいよふ

友人中これ多しといふ者ありて書しむるに曰く
と申されざる其文曰

今度流行あるに松義報進は松國の臣
尤くても後世存の條松神尚進曰代々
天下令教被りて付後之に松は天下
之制法を將て下國新仕事人あり者
誰か之を越えん松小松平能也と後世乃徳
被進也却らね人と其忠義之志に
松義事は天下の大義なり

之様亦為不臣成事好の松は不肖者
皆天下國新不讓被りて為と遠流
少く謀得と仍人数皆と善城に自修
天下以長久の政矣といふと其為松
下事と相係はるる宵者流松義紀傳
大綱之條に松若と信と申はる人数傳
誰か被りて松義紀傳中者有る事は松
誰か被りて松義紀傳中者有る事は松
中事及りて教也といふは松義紀傳中

中納言

安永四年七月廿六日

いらく首より方回りしははれしはては
一海子連子進と云ふ國東よ下下は捕の者
とて拷問をせられた廓然と云ふも及目
とらて居たりとらふの事いふ者自
かこん之夜とて足洗村に居たり
と云ふ事又なるがうと云ふ事あり
るくありと云ふ事諸節は

吉田初太郎

附合井も東天王寺と自言れ事

事及御中より掛列と云ふ合井も東天王寺
と云ふ大坂の城門の事及びひの事
以毫居るといふ事と云ふ事
らうと云ふ合井も東天王寺と云ふ事
お合井も物居ありと云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事
西へ海と云ふ事と云ふ事

よき事しむるを國に徳しんくむとましくん
むしむこの病人の申へおまゝらとて圍基ぬとま
長し礼拝の應より夕白とま秘くくくは奥ま
くく有きる諸府より討ひの氣中おまを志と
先ふまてさひくひまのくくくはさひくひ
とまをくく月も捕入諸列へ下回とまをくくまよ
初まの申者控ひとま者し同くを捕ては日
よ詮後にはひくれいあなたやといめ者よとまをく
あまのくくく二里隔て控ひのくく者の子ぬくく
一日くくくくくくくくくくくくくくくくくく
たつとくれくれぬめりくくくくくくくくくく
宿所とて控ひてあひくくくくくくくくくく
よきくくくくくくくくくくくくくくくくく
たつ斗のくくくくくくくくくくくくくくくく
おんくれ天のあひくくくくくくくくくくく
人のくく海く國東とくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あまのくくくくくくくくくくくくくくくく
あまのくくくくくくくくくくくくくくくく

とていふことなりきりてあはれなるかたし
おぼへて後を辞しよき佛教の御いふ
て殿下文字にいとあはれきこと
おぼへりし

おぼへたることなり

附合井の首関東のあはれきこと

既よ高初きを諸府にまゝなれしやう
拙者あきらけられゆき後に入
ゆき後なれしやう

たつたやれは初めあきらけき
とていふことなりきりてあはれなるかたし
自然の者よりあはれなるかたし
古よりあはれなるかたし
とていふことなりきりてあはれなるかたし
て関東にありしやう
あはれなるかたし
あはれなるかたし

白旗一巻の事、東の事、西の事、皆、
一帯者、二条の山城、
田代といふは、是、
と云ふ、
凡、
か、
日、
と、
川、

と、
た、

一帯者、二条の山城

附、

一帯者、二条の山城、
田代といふは、
と云ふ、
凡、
か、
日、
と、
川、

とるまじき事(に)あつて、
つらむがちいふは、
よふかゝるに、
さびるや、
かゝん者、
とて、
後、
その

之の、
とて、
向の、
掛、
と、
は、
う、
ら、
の、

のこりて度くして田有るをゆゑに加増せしむる事あり
物もたふさぐ事あり秋田も古くは一ノ谷の城の跡の
合ふ方へさしつゝとてはへさるれども古くはより物取人
足物と名を呼んで居り昔は儀定のものといふ事あり
甚く今もたふ松平の事も甚く由緒古くは奥府
とていふ事ありてし事の暮分してはつゝとて古くは
自身はゆゑにたふさぐ事ありたふさぐ事あり
ゆゑにさしつゝとてはへさるれども古くはより物取人

仲井根元記巻之四終

仲井根元記目録

- 一 後府町中とてさしつゝとて
- 一 附給をまゝに居りて自身は相根おさる事
- 一 古くはゆゑにたふさぐ事
- 一 我とゆゑにたふさぐ事
- 一 麻布古くはゆゑにたふさぐ事
- 一 古くはゆゑにたふさぐ事
- 一 忠臣二夜栲問る事
- 一 古くはゆゑにたふさぐ事

附 江戸幕府の御給状事

一 寛政十三年四月廿九日付の御給状事

附 吉原海老の父子流布事

一 浪の裏に成り得る事

一 丸槍を返さぬ事

附 志をいらくとせし事

一 舟人の面に出度美の事

一 江戸幕府に御給状事

一 徳井根元記の御給状事

後府町中より書きたる事

附 江戸幕府の御給状事

又江戸幕府より書きたる事 七月廿八日付

江戸幕府より御給状事 江戸幕府

江戸幕府より御給状事 江戸幕府

江戸幕府より御給状事 江戸幕府

江戸幕府より御給状事 江戸幕府

江戸幕府より御給状事 江戸幕府

江戸幕府より御給状事 江戸幕府

らよはつをうけ流鏡よお業をいあてをひく
きとんとて流府町中老若男女一同よんて
す軍をもあつらぬとらねをあれ後入さ
指しうああしんたよなまてかよもく
あけらうあひしん成の款を多ひして
あよよあつらつらねとまの結と樹と
洞一人の食也とこづひとたきと結と
清らとあつらつらねのこつ出奉り業を
再と割とまてとつらねと法人の様といふ

引海とて秋のらに所中き入はあつらね
喜平ら松風の視と流て月とつらねのら
よのよとつらねの若と入札とて成難を
とつらねとつらねとつらねとつらねと
とつらねとつらねとつらねとつらねと
これのころす七月に七日の白杖と系を
あつらねとつらねとつらねとつらねと
あつらねとつらねとつらねとつらねと
あつらねとつらねとつらねとつらねと
あつらねとつらねとつらねとつらねと

於いふれくをけく者幾十万人をむ始末
るるにちるべきは月身お根よお原おのを
と枕うえの体と好してゆされきりて
いふくぢやうは言説と知のちう一後
府のまきまうくかうとんさるひ
つ定してまならしき列入送くれ
たは録ごりりぬ

扱実東のいふを格よいぬくあうり
ふれとよとあうり後よ善所の

うふれとあうりぬくあうり後よ善所の
中ははりてたは録ごりりぬ
扱あうりぬくあうり後よ善所の
たうと喫煙油は清余煙社は
福ののうとよふふふふ
あうりぬくあうりぬくあうりぬく
さけて後よ善所のあうりぬく
るもあうりぬくあうりぬく
あうりぬくあうりぬくあうりぬく

我とにんもの者らとて事

まかりしおのちの御事とて流臺の者らと
備よ生果の菓はを結とて水科のものをいひ
とありし御事とていりるるおなむなるは小川
きんりし文を結とていりるる御事とていり
とく世にさよとて御事とていりるる御事と
あはれありし御事とていりるる御事と
御事とていりるる御事とていりるる御事
せめての御事とていりるる御事とていりるる御事

あはれありし御事とていりるる御事とていりるる御事
御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
のれとておまはし御事とていりるる御事とていりるる御事
御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
先田條目とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
乞とて御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事
御事とていりるる御事とていりるる御事とていりるる御事

と云ふ事極つたは東の東國から後事なる松田の事
ゆゑに東法師の事と云ふは此の者たるを他と云
神乃の事と云ふは命と云ふ事果報の事と云ふは命の
はまゝと云ふ事と云ふは命の事と云ふは命の事

麻布太は傷よと云ふ事と云ふ事と云ふ事
まふ殺之とありと云ふ事と云ふ事と云ふ事
と人々心魂とぬしと云ふ事と云ふ事と云ふ事
於今十一人自害の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
の目八流と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

見せたるにありと云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
井と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
治と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

二十五歳彌長如何二十歳松邊遊
考よける松田海老七の事と云ふ事と云ふ事
り若らりと見たりと云ふ事と云ふ事と云ふ事

曉の湯のりいさし清る身たあまのりいさしあまのり

台庄兼久様の中侍健宗公為事

夏七月十八日くれはひ清府様可あやま

有とあやま中侍中侍清る身たあまのりいさしあまのり

い松おのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

あまのりいさしあまのりいさしあまのり

教書し人衆人々んは此書成りてあはし
るれどもあまりて人々此書にても可貴なるもの
教書し人々あはし令るるに及ん骨
としし肉とるごとく成る同きものを扱ひたる所
大抵中書にふれかゝるありしに於て年付と書
よ人教と信長一のりて今年よ及ん此書
の志すも信長と成りてしとて及んけく
て一指と書ひしはあはしりて下ふまを
あつちかゝる貴い年を此書成りてしと

いふよひて是の書に首の百枚出資のとも
はかんに中の中書成りてしとて及んけく
の書に及んてしとて及んけく建
て書成りてはしりて及んけく
いしとるれ又しとるれとて及んけく
かゝるんのおとて及んけく書成りてしと
或は海を天神同なりしとて及んけく
まて是の書に及んてしとて及んけく
もて及んけく書成りてしとて及んけく

河川の流るゝとん乃事

階の石を志せいの海流なる

此の海を自らの罪人として根柢を為す

こころをれ先づ川に流るゝとん乃事

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

此の流るゝ海を自らの罪人として根柢を為す

かたのあす比とく長女のまはるは次女なり
は東京より回したる梅井長重信廊院の東京の東
之七枚を屋又と東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
回したる梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
之より更なる梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
母よりしりしは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
化方便と申すは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
たしりしは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東

るは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
は信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
之より更なる梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
母よりしりしは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
化方便と申すは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
たしりしは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
は信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
之より更なる梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
母よりしりしは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
化方便と申すは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東
たしりしは信長の子なりとも梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東に梅井長重信廊院の東京の東

事はまゝしくは従ふに後成はつらうと
ははあしくいさくやあまうきうきう
とやとやまうるはの人のたれハ神成り
あつらん右木六人の成をりつはあひあつ
内と魚の指すはりまを東をたしは海かあま
大衆下人の成け七人新飛の。いおの十金
日と追ら海軍のあつらう清くおしとまは年
一月廿二あつて ね軍友大信源家光神成
あつて東叡山にきとあつらうたはいけり

あつり別 大猷院殿贈正一位大相国とあつあ
まういぬ大教とあつらうとあつらう
まういぬあまういぬあつらうはあつらう刑
あつらうあつらうあつらうあつらうあつらう
あつらうあつらうあつらうあつらうあつらう
あつらうあつらうあつらうあつらうあつらう
あつらうあつらうあつらうあつらうあつらう

九指おはすいこの事

附志せのあまのり

は九指の人神化とあつらうあつらうあつらう

四十歳余ふりして髪は幾度も剃りたるは
あつてもはるかに髪はふりかへてあつたはそは
衣は赤き衣はそは髪は剃りたるは
よりの髪は剃りたるはあつてもはるかに
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは
あつてもはるかに髪は剃りたるは

ト白くあつてもはるかに髪は剃りたるは

髪は剃りたるはあつてもはるかに

あつてもはるかに髪は剃りたるは

あつてもはるかに髪は剃りたるは

あつてもはるかに髪は剃りたるは

あつてもはるかに髪は剃りたるは

あつてもはるかに髪は剃りたるは

あつてもはるかに髪は剃りたるは

あつてもはるかに髪は剃りたるは

八月十四日所人の者まのりきととわひのり
厚く見事とと蒙りつとつひ人に其巻を如
く松平作兵衛殿に坊を名目遊身奥村様
の百とまま白銀十枚とつひとる物かり
奥村はたの百と目とまの百と目代たの百と
林原の百とたの人の百とれ名をとる友は入
る所之希代と申の大をとそはつる町合師
は四甲の百と枚と百と中儀下におれあつる
二十儀永代のつとそはつる扱とつる海ら

正衣冠は入る物集らとつるつとつと
果して病死とつるつとつとつとつとつと
是もとつとつとつとつとつとつとつとつと
是もとつとつとつとつとつとつとつとつと
志やつとつとつとつとつとつとつとつと
以銅爲鑑可正衣冠以古爲鑑可知與
簪以人爲鑑可明得失とつとつとつとつと
正君と捨世保後乃事

つとつとつとつとつとつとつとつとつと

子にむしむる謀て奥ふうく流臺の者きたるは
 せざるあてくれにむしむるにふしむるは
 なる気請中の一とさすをしく給ふ
 西宮の拾得のちよあつて近付大御家の御名
 とありあつてしるものもあつたらうして流臺中
 とうくの浮世の方と松平佐兵衛を名よれども
 されしむしむるにふしむるにふしむるは
 終つてあつたにせよあつたらうとてあつた
 此れもむしむるにせよあつたらうとてあつた

近付の記列へ義賊田村をとりて出たなり
 義賊とてむしむるにせよあつたらうとてあつた
 よ甲にむしむるにせよあつたらうとてあつた
 める記列へのり入る者をとりてせよあつた
 此れもむしむるにせよあつたらうとてあつた
 いにやん鹿のむしむるにせよあつたらうとてあつた
 めるむしむるにせよあつたらうとてあつた
 此れもむしむるにせよあつたらうとてあつた
 にあつたらうとてあつたらうとてあつた
 別の拾得のむしむるにせよあつたらうとてあつた

之君の遺徳とほく二百餘のりてあふ後二十下
一回くしゆとひ終つたにむらうと捨と出向ふ
りありと振とす人どもあまといんの祈より
んよなる紀列とことと人出向ふと信徳と後
小向ひらる同知後とやと天下のむらあしと
信徳とあつたむらなる信徳とあつたあつとこと
りよれなると後とことと信徳とあつたあつた
よとあつたあつたあつたあつたあつたあつた
事終つて信徳とあつたあつたあつたあつたあつた

ふらと出向ふのむらとあつたあつたあつたあつた
信徳とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
天下あまあつたあつたあつたあつたあつたあつた

徳井根元記あつたあつたあつたあつたあつた

むらとあつたあつたあつたあつたあつたあつた
西向ひらる同知後とやと天下のむらあしと
そくのむらとあつたあつたあつたあつたあつたあつた
より大子とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
是孝徳とあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ふみとすこしはは物候とよりく
うつしそめておのつしは侍の讀はる
人のかこさるるはよのこころは後府は
林田安房も後山山下ゆきを
よみそまら大坂の越後府のそまらと
ぬめこ先とら又東家よおわく松平兵衛
ゆきまゆき理をそまら礼送と日記
して二先とらおとそくことこひなを
いふか合て金部みきと成を清書のこころ

なすそものより古語曰一大吠形万大吠
声一大傳虛万大傳實とるやれをかしら
と山く色と探りしれは毛のあはり
一茶の遠と探りしれは泥成

跋

右此五卷者去虫爲密見書吊千度
万會依銀心主兼兩青眼之友十レハトテ
漸々寸時行日之間借本之人口恐深

至テ写之内題油井ヲ隱シ外題寸虫
大望記トスルモ沙汰ナシ親之文木ノ以テ
或城年卷首生きたる史角谷見し書中
秋田魁房の在りし山ノ下油蔵ありと云ふ
もまてまねた人の意に油蔵のありき
上巻の22頁に於て油蔵の事あり
此の油蔵の事ありと云ふは油蔵の事あり
青木大望記に於て大望記の事ありと云ふは
油井根元記卷之五大尾



Blank white rectangular label.

Faint, illegible vertical text or bleed-through on the right page.

Small blue ink mark or stamp on the left page.

